

Title	保証の転位 国家的抑止の成立
Author(s)	市田, 良彦
Citation	人文學報 (1992), 70: 95-124
Issue Date	1992-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/48378
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

保証の転位

——国家的抑止の成立——

市 田 良 彦

はじめに——十八世紀後半の〈モンテーニュ〉

- I 転回点——七年戦争と反戦論
- II 〈永久平和論〉批判——客体的保証の主体的条件
- III 啓蒙の戦争学——国家的抑止と兵士の身体
- IV 〈武装せる国（民）〉——抑止主体の自己触発

はじめに——十八世紀後半の〈モンテーニュ〉

7年戦争はとうに終わり、大革命はまだ当分始まらないころ、ある人物が戦争についてこんなことを記している。

「人間はずっと人間の敵であり続けるのだろうか。この最高に有機的な存在は、もっとも卑しい動物でも享受している利益を、未来永劫手にすることがないのだろうか。互いに平和に暮らす利益を。戦争は栄誉と野心の対象を提供してくれるが、それらはどんなにがさつな人間にでも容易に手に入れられる。〔……〕戦争は悪徳を高尚なことがらにし、そこかしこで正義の代わりに力を置いて、我々の有益な情念を転倒させてしまう¹⁾。」

彼は明らかにモンテーニュを読んでいた。動物よりも貶めてみせることで人間的争いのおろかしさを際立たせ、栄誉と野心という人間的価値を冷笑するその態度は、疑いようもなく『エッセー』に由来しているだろう²⁾。また彼はモンテーニュほどではないにしろ、同じように名門の貴族であるにはちがいがなかった。1734年に生まれ、騎士として従軍して公共の責務も果たしている。とはいえ彼は田舎の領地に隠棲して思索にふける生活を良しとしているのではない。書物から時おり目を上げ、塔の一室から庭と家畜小屋を見やる暮らしを説いているのではない。何よりも彼の立場がそれを許すはずもなかった。シャステリュクスはパリに住む現役の軍人であり、高踏な詠嘆に聞こえなくもない右の言葉が含まれた書物を書いた後も、彼は軍隊を退く気配さえ見せていない。それどころか、次々に生まれつつあったフリーメーソンの軍隊内ロτζを基盤に、様々な軍制改革運動に手を染めることが、その後の彼の生活の主要な部分であり続けるだろう。栄誉と野心に支えられているはずの軍人の口から出た、奇妙な戦争蔑視。これ

は自らの職業を貶む、屈折した貴族の心情なのだろうか。同じような傾向は、似かよった立場にあり、軍人としてはシャステリュクスよりもはるかに歴史に名を刻むことになるギベールの記述にも認められる。「武器を扱う職業は理性や哲学をこととする職業ではない。それは自然に反する職業であって、彼らの動きは絶えず抑えなくてはならない³⁾。」「いかなる軍隊も自然に反した集合と秩序を形成し、したがって軍隊の存続はひとえに自然に反した手段によるほかない⁴⁾。」あの時代にあって、「自然に反する」という言葉がどれほどのペジョラティブであったかは改めて記すまでもないだろう。

しかし実のところ、彼らにあって貴族としての実践的生活と私人としての思索的生活、おろかで悲惨な戦争と高貴なる平和は、すでに「文」と「武」のどちらにより大きな価値を認めるかといった選択の問題ではなくなっている。そうした選択の余地のあるところでなら、意に反して政務や軍務に就かなくてはならない現実にたいして、屈折した心理を働かせることもあったろう。モンテーニュその人の場合のように。しかし、とギベールなら言ったはずである。「戦争、戦争術、軍人を卑しめようとする哲学は、その高邁な啓蒙の意図にもかかわらず、はなはだ危険であり、浅薄であり、光のかけらもない。[……] 近代の戦争システムは、排斥や哲学的呪詛どころか、人民の感謝と政府の最大限の顧慮に値する⁵⁾。」彼らにとって、「武」は避けることこそ罪な問題になっているのである。戦争はおろかしく悲惨であって、経済的に見ればほとんど耐えがたい浪費であるが、だからこそその専門家によって分析されなくてはならない。あれかこれか、ではなく、これを思考しなくてはならない。シャステリュクスやギベールはモンテーニュに劣らず平和主義者だった。ギベールは「武」の人のみならず、戯曲のものにシレスピナス嬢のサロンに通って彼女の愛人にまでなって「文」の人としても名を残す。しかし「平和」は「文」人の私的生活の属性ではなく、現代の戦略空軍が「平和こそ我らが任務」というスローガンを掲げるのと同じ意味で、すぐれて「武」人の公的任務となっているのである。『エッセー』の16世紀から、『公共の幸福論』（シャステリュクス）と『戦術概論』（ギベール）の18世紀後半にかけて、「平和」はその持ち手を私人から公人へ、誰であってもいい「人」から専門家へと変えている。選び取られる理想から、分析され、技術的に保証さるべき知識の対象に変わっている。〈公共の幸福〉論におけるモンテーニュの援用が何よりも雄弁に、この変化を物語っているだろう。

平和は、軍事的な主題となった。とはいえ平和は政治体の状態や私生活の一コマでなくなることができるわけではない。モンテーニュ的生活はひとつの理想像ではあり続けるだろう。ただ理想的生活はもはや周囲の現実から切断されずに、その直中に置かれ、そこから絶えざる浸食を受けるのである。「私」の幸福は「公共」の課題となる。したがってむしろ、一つの持ち手変更の結果、戦争 - 平和、軍事 - 政治、公 - 私それぞれの分割と連続まで不分明になると言うべきだろう。その上になおひとつの「課題」において、三つの系は絡み合い、もつれ合っ

いる。私人でもある市民が公共の場の前面に登場し、戦争の脅威に晒されつつ政治を変革する大革命の経験は、すると少なくとも、結び目をほどいてもう一度選択を可能にしてくれそうにはない。戦争の抑止によって平和がほとんど定義されてしまうことから始まる、この巻き込む波の跡を辿ってみたい。

- 1) François-Jean de Chastellux, *De la félicité publique*, Paris, 1822, p. 28. なお同書初版は1772年、アムステルダムで公刊された。
- 2) 動物と人間の対比については、たとえば第二卷十二章、「われわれにある才能のうち動物の中に見出されないものが何かあるか。蜜蜂の社会以上に秩序が整い、役目や職権が細分され、揺るぎなく維持されている国家があるか。[……] われわれは動物たちの大部分の仕事を見て、いかに彼らがわれわれよりすぐれているか、いかにわれわれの技術が彼らを真似することができないかを、十分に認めている。」（筑摩書房、世界文学体系 9 A 『モンテーニュ 1』, 1962, p. 328）榮譽 *gloire* については第一卷四十一章、第二卷七章、十六章など。野心 *ambition* については第二卷三十三章、第三卷十章など。
- 3) cité par Jean-Paul Charnay dans “Guibert ou la stratégie des lumières”, *Stratégiques*, p. 77. 同書については本稿第三章注 1) を参照。
- 4) *ibid.*, p. 79.
- 5) Guibert, *Défense du système de guerre moderne*, IV-2, *Stratégiques*, p. 561.

I 転回点——七年戦争と反戦論

榴弾が開発され、グスタフ・アドルフの軍隊がそれまでもっぱら要塞攻撃に用いられていた砲を初めて野戦に使用した17世紀後半以降、陸上戦闘の歴史はそのまま火力の量と密度が増大していく歴史でもあった。ほぼ一世紀の間に、小銃の発射速度は数倍になり、戦闘部隊の3分の2は小銃を持つ歩兵が占めるようになった。フランスでは最初の平民将校が砲兵隊の中に誕生した（それ以前には、大砲を操作する者は技官であって軍人ではなかった）。とりわけオーストリア継承戦争（1740-48）と7年戦争（1756-63）は各国に火力の決定的重要性を思い知らせたという¹⁾。45年のフォントノワの戦闘についてヴォルテールはこう記している。「戦闘ではどんな弱い兵士でも大砲をうまく操作すればどんな強い兵士にも勝つことができる。フォントノワの戦闘ではすでに戦場の主導権を握っていた英国の全部隊を後退させるには数門の大砲で充分であった²⁾。」この大砲にはウルチマ・ラチオ（究極の理性＝最後の手段）という銘が刻まれていたと伝えられるが、ヴォルテールはその言葉を肯定するかのようには結論付けている。「大砲の発明と新しい戦法は強国の間に平等を確立し、その平等が人類を旧来の荒廃からまぬがれさせ、戦争の不幸を減らす、戦争が起これば従来よりはるかに不幸であろう³⁾。」もちろん、一つの発明は歴史を一足飛びに「最後の」日まで運ぶわけではなく、ルイ14世の治世が1745年のフランスに残した大砲は強力かつ堅固ではあったものの、非常に重たく可動性に欠けていた。鈍重

な兵器にたいする過度の信頼は、歴史の停滞を招く。太陽王の威光が強すぎたためか、彼の死（1715）後約50年間、フランスはほとんど軍隊（装備、軍制、戦術）に手を着けていない。おまけに奇妙なことに、その間、実弾発射訓練は兵士一人一人でも集団でも行われていなかったらしい。当時の技術水準が許す範囲で戦法を極限にまで練り上げたのは、むしろフリードリヒ2世のプロイセン、それも7年戦争の後半に差しかかってからのことだった。同戦争開始時340名に一門だった砲を、彼は最終的に220名に一門に増やし、鉄の規律を誇った歩兵は他国よりもはるかに素早く隊型を変え、倍近い速度で一斉射撃を繰り返すことができた。応酬する軍隊は騎兵より小銃兵を増やすほかになく、七年戦争の末期、敵と味方の双方で、一日の弾丸使用量は加速度的に伸びてゆく。ヴォルテールが戦争を飢餓、黒死病と同列に置いて「普遍的狂乱」と呼び、この「不可避的な災害」の中で「人情、礼節、中庸、節制、従順、英知、信仰はどうなるのか」と嘆いた⁴⁾のは、ちょうどその頃である。「戦士たちはもはや互いに接近しない。兵士は烈しい肉弾戦で倍加するあの熱情、熱狂を失ってしまった。実力、技量、武器そのものの強さも無益である。武器の中でもっとも恐ろしい銃剣を戦争で使うことはただ一度あるかないかである。／頻繁に大砲の恐怖に取り囲まれた平原を両軍は沈黙のまま前進する。[……] 勇気をふるう余地のないこんなやり方 [……]。両陣営とも等しく消耗して平和を結ばざるをえない⁵⁾。」

こうした光景を現出しはじめた同時代の戦争は、デイドロにかかるとは、ひょっとするとカタルシスを通して人々の健康に寄与することもあるかもしれない悲劇どころか、ひたすら忌むべき政治体の「病」であるとまで言われることになる。「ホップズは人間がつねに全員にたいする全員の戦争状態にあると主張した。この陰鬱な哲学者の見解は、苦痛と病の状態が人間にとっては自然であるとしても彼が言っていれば、もう少しもっともらしく聞こえたらう。[……] 戦争は人間の頹廢の果実であり、痙攣を伴う政治体の重い病である。政治体が健康である、すなわちその自然状態にあるのは、平和を享受しているときだけなのだ。[……] どんなに華々しい勝利も、戦争の犠牲となって失われた多くの成員を、国家に埋め合わせすることはできない。勝利そのものが国家にとっては深い傷であり、平和だけがそれを癒すことができる⁶⁾。」

「災害」は涙と諦めの対象であるが、「病」は治療と予防の対象であるだろう。勝利の暁にすら戦争は国家にとってマイナスであるとする見方は、ルソーによっても共有されている。「今日の戦争のやり方によると、戦争がもたらす人口減少は [……] 著しい損失にはちがいないが、それと同時に国家全体で、人々が生まれないため、租税の増加のため、商業の中絶のため、田園の荒廢のため、農業の放棄のため、死亡する人々の損失以上に重大で取り返しのつかない損失が生じる。[……] 強大となったために、かえって衰退していることに誰もが驚く⁷⁾。」ともあれ、18世紀の後半になると、知識人たちはほとんどこぞって戦争そのものを攻撃しはじめる。使用される火薬の量と兵士の死亡率の手を携えての高まりは、「災害」としてであれ「病」と

してであれ戦争を忌避する一群の反戦思想を生み出し、軍人ですら、啓蒙の理想に参加しようとするかぎり、それを無視することは、まして敵視することは到底できなくなったのである。シャステリュクス、ギベール、ラクロといった「軍人哲学者」*militaire philosophe* と呼ばれ、フィロゾフたちと浅からぬ親交を結んでいた者たちの著作は、こうした動きの中から排出されてきた⁸⁾。近代の戦争はまず「災害」や「病」という人の自由にならないもの、自立した客体として立ち現れ、ついでその客体性が分析の対象になって“自由にする”という問題を生み出したわけである。もちろん、この自由にならない客体は人間という主体の行為にほかならない。ルソーはクラウゼヴィッツを先取りするかのよう⁹⁾に、戦争が「敵を滅ぼそうとする意志の中に存する⁹⁾」と喝破した。主体的行為であるにもかかわらず、自由にならないどころか主体の「損失」になる客体、人の意志を「取り返しのつかない」ぐらい越えてしまう同じく人の意志、戦争のそんな性格が戦争をめぐる新たな知識を求めるとともに、やがて戦争は崇高であるとのカントの言明を引き出すまでになる¹⁰⁾。主体と客体の狭間にあって、主体と客体を目まぐるしく反転させながら双方を文字通り破壊してしまう戦争は、とにかくそれまでになかった問題系を一群の者たちに向かって差し出した。人のこの呪わしき部分を、いったいどうするのか。「社会状態から生まれる¹¹⁾」この悪を、自然状態に戻ることなく除去して進歩の道を歩み続けるには、いったいどうすればいいのか。戦争は人間の統制に服し直さなくてはならず、「政府の最大限の顧慮」を払われなくてはならない。

変化は知識人だけのものではなかった。ある研究者は様々な訴訟記録やパンフレット類を探索して、軍事的事象全般をめぐる「1760年代の心理的かつ知的な革命」を発見している¹²⁾。より広い世論のレベルでも、軍隊、軍人、兵役、戦争に注がれる眼差しが大きく変わったというのである。たとえば軍人が犯罪を犯しても「世紀の前半には、将校と兵士は大抵の場合、個人として判断され、その行動もほとんど人物にしか帰せられていなかったが、彼らは次第に、軍隊社会と軍事制度の代表者と見られるようになっていった。[……] 1720年頃にはありふれた悲しみしか呼ばなかったような事件が、1771年には《大騒ぎ》を引き起こし、近衛兵に対する報復を懸念させた。[……] 軍隊は批判的な目を向けられている¹³⁾。」また7年戦争の渦中、パリでは一種の敗北主義が広く認められ、諸戦における現実の敗退がそれに一層の拍車をかけた。巷には「犬と娼婦と兵隊お断り」という看板を掲げた店が現れ、ヴォルテールがブルガリア軍に託して描いた¹⁴⁾ような、女を強姦したあげくに焼き殺す野盗集団的な兵士のイメージが広まっていく。もちろん、傭兵をめぐる良からぬ噂はるか以前から囁かれていたであろう。しかし「大砲の恐怖に取り囲まれ」ながら前進し、声を上げる間もなく死んでしまうかもしれない戦争、「勇気を奮う余地のない」戦争が、兵士たちの心理を荒廃させ、彼らにそんなイメージを増幅させるような振る舞いに実際に及ばせることもあったであろうことは、想像に難くない。彼らが手足を失う確率は決して低くなく、年間の死者の数は4万から5万に達していた。戦場

における悲惨な明日が彼らを街中における今日の乱闘に駆り立て、18世紀の後半、兵士をめぐる訴訟件数は鰻登りに増えていった。大革命後の軍隊再編の出発点を印すデュボワ・克蘭セの演説（89年12月12日）では、旧体制下の兵士は「住処をもたぬ無頼漢 *gens sans aveu, sans domicile*」と特徴付けられている¹⁵⁾。人々はもはや、兵士が手に短剣をもって市民を傷つけるのを許さなくなったのである。戦争が知的に問題視されるだけでなく、その担い手が感情的に忌み嫌われ、両者が相まって一時代の確実な潮流を形成していた。

戦争がもっぱら主体的行為のうちに止まってくれれば、反戦意識の矛先もその戦争を起こす者へ、宣戦を布告し自身を軍旗にシンボライズする戦争当事者へ向けられるだろう。最も端的には「敵」として認定される集団の代表者、7年戦争の頃のフランス人にとってならイギリスの王が、批判を一手に引き受けさせられる。戦争が君主の自由裁量で開戦はおろか被害の規模と範囲まで決定できるのであれば、君主に集中された批判はなるほど正当であり、かつまた戦争を抑止したり被害を最小限に抑えるためには実際のですらあるだろう。そして開戦の決定については君主は以降もほとんど何ものにも束縛されない主体的自由をもち続けるため、18世紀後半の反戦意識のかなりの部分は君主に向けられることになる。啓蒙思想家たちの戦争一般に対する批判も、イギリスにたいする不信や警戒とないまぜになっていたことはよく知られている。イギリスに海外植民地を奪われてしまったのは、フランスにおいて果たしてどこまで“進歩”が可能であるだろうか。自国内に他国の軍隊が侵入して搾取を欲しいままにすれば、“啓蒙”どころではなくなってしまう。しかし批判はあくまで戦争一般に向けられ、誰がそれを行っているかとは一応別の問題として表明された。そしてここにおいて反戦意識は主権をめぐる議論の土俵と接触する。自由になる戦争は、主権者の意志を実現する道具の域に止まってくれ、それ自体として国王主権を脅かすことはないが、一般的な災禍として戦争を認定すれば、国王の権力とその権力の能力の峻別、乖離まで呼び込まれてしまう。主権者としての国王の能力はその権力に見合うだけの量もなく、国王主権あるいは君主制は国家全般の権力としては相応しくない、それに値しない、と論理は告げる。災禍や病として戦争を除去するよう要求する者は必然的に、国王主権を越える主権、国王に取って代わり、戦争の抑止によって権力に相応しい能力を実証する主権者を考えなくてはならないのである。この必然性に対する無理解——ルソーによるサン＝ピエール批判はそこに収斂していくように思われる。その批判は、18世紀後半に登場した反戦意識が、主権論と交差する地点を垣間見せてくれる。

- 1) 十八世紀の戦争全般については次の二書を参照。Robert S. Quimby, *The Background of Napoleonic Warfare*, New York, 1957. 特に pp. 80-105. Jean Colin, *Les Transformations de la guerre*, Paris, 1912.
- 2) ヴォルテール『哲学辞典』〈追補〉、「武器、軍隊」の項。高橋安光訳、法政大学出版局、1988, p. 415.
- 3) 同。

- 4) 『哲学辞典』「戦争」の項。p. 225.
- 5) 『哲学辞典』〈追補〉「武器、軍隊」の項。p. 415.
- 6) Paix, *l'Encyclopédie*, Diderot et D'Alembert éd., 1757, tom. XI, p. 768.
- 7) J-J. Rousseau, *Extrait du projet de paix perpétuelle de M. l'Abbé de Saint Pierre*, *Œuvres Complètes* III, éd. Pléiade, p. 582.
- 8) ギベールを中心にした軍人哲学者については, Jean-Paul Charnay et al., *Guibert ou le soldat philosophe*, Chateau de Vincennes, 1981. を参照。特に Paul Verniere, “La condition militaire et les Lumières”.
- 9) ルソー「戦争についての断片」, 『ルソー全集』第四巻, 宮治弘之訳, 白水社, 1978, p. 395. この「断片」はブレイヤード版には未収録。
- 10) カント『判断力批判』第二章二十八, 「戦争ですら, 規律と市民権への神聖な敬意をもって行われるならば, それ自体にある崇高なものをもち, そのように戦争を遂行する国民がますます多くの危険に晒されて, しかも屈せず勇ましく危険に対抗しえたのであればあるほど, その国民の精神態度を一層崇高なものにする。」(河出書房, 世界の大思想11, 『カント』下, 1962, p. 221) 他に『学部争い』第二部「哲学部と法学部の争い」(理想社『カント全集』第13巻, 1988.) も参照。そこでは革命(戦争)のもたらす熱狂が人類進歩の記号と見なされる。
- 11) J-J. Rousseau, *Que l'état de guerre naît de l'état social*, *Œuvre Complètes* III, pp. 601-12.
- 12) Jean Chagniot, *Paris et l'armée au XVIII siècle*, Paris, 1985. 特に第四部を参照。
- 13) *ibid.*, p. 527.
- 14) ヴォルテール『カンディッド』第二章および第三章。筑摩書房『世界文学大系 第16巻』, 1960, 所収。
- 15) Dubois de Crancé, le 12 décembre 1789, *Archives parlementaires de 1780 à 1860*, première série, tom. X. p. 520. 同議事録からの引用は以下, AP. tom --- p--- のように記す。

Ⅱ 〈永久平和論〉批判——客体的保証の主体的条件

そもそもルソーがサン＝ピエール師の『永久平和論』(1713)の要約—抜粋版編纂を請け負った事実からして, 戦争問題にたいする同時代的関心の高まりという背景を抜きにしては考えることができない。師の遺族から依頼されたこの仕事にルソーが取りかかり始めるや, それだけでパリではかなりの噂になったという。戦争をいかにして抑止し, 恒久的な平和をいかにして実現するか, その方策を追いかけて行くためにはサン＝ピエールの著作はとりあえず参照できる格好の素材であったにちがいない。国家連合 *confédération* を形成し, 諸国を永久に続く取消のできない同盟関係に結び合わせ, 連合に司法機関と強制的武力を備えさせれば, ヨーロッパ諸国は戦争を恒久的に抑止できるだろう——この「証明済み」のことがらが, 「きわめて重要な」参照基準となる¹⁾。そのうえでなお, ルソーは諸国の「絶対的独立状態」という「見掛けの利益」は本当に廃棄されうるのか²⁾, と問わねばならなかった。「計画はきわめて賢明であったが, その実施の手段には著者の単純さが感じられた。著者は素朴にも, 会議を招集して, そこに自分の条文を提出するだけでいい, そうすれば一同はすぐに署名してくれて, 万事

終了するはずだと思い込んでいた。[……] 事態を確立する手段についてはまるで子供のように判断していたのだ³⁾。」ルソーによるサン＝ピエール批判はおおむね、「保証」と「手段」の欠如という点に尽くされている。「私はすべての諸国の間に現存している関係は、その諸国のどれにも、自己の体制を改造するために必要な時間と保証を与えないはずだということを発見した⁴⁾。」「師は自分の機械が動くのを見たいと心から思っていたが、その機械を動かす手段のことはほとんど考えていなかった⁵⁾。」かくも素晴らしい平和構想は実現を〈保証〉されているか、その〈手段〉が与えられているのか。言い換えるなら、国家連合の実現を保証する手段はどうすれば手に入れることができるのか。

しかしルソーは保証を探し求めてサン＝ピエールの著作に向かったわけではなかった。彼は当初、あまりに冗長なために読みにくい師の著作を要約するだけで充分だと考えていたし、「自分の思想を作り出すよりは、他人の思想を好きなように解明したり、推進したりするほうがよい⁶⁾」、要するに、読みながら考えようとしていた。読みながら、保証がないと気がつき、それと同時に、あるいはそれによって、保証は不可欠であるとの暗黙の帰結を引き出している。保証 *sûreté* とは客体的な担保 *sûreté* でもあるだろう。戦争の抑止には、当事主体とは別の、当事主体から切り離された客体的な担保が必要である——これは少なくとも自明な命題ではない（戦争は意志の中に存するというルソー自身の、主体主義的定義に照らして）し、戦争そのものが君主の権限を越える一般性と客体性を備えるにいたった事情に裏打ちされてはじめて、一般的な正しさを獲得する。戦争は君主の主體的な意志を越えるから、客体的に予防を保証されなくてはならない。しかし興味深いのは、ルソーがその欠如を批判した「保証」そのものは実のところ、サン＝ピエールの中にもあったと言える点であろう。というか、「保証」はサン＝ピエールその人によって表明され、提出された問いだったのである。「条約も勢力均衡もヨーロッパを戦争の不幸から守る十分な予防策ではない。[……] 十分な保証 *sûreté suffisante* をまったくもたない平和条約 [……]⁷⁾。」（強調——原著者）「十分な保証」は『永久平和論』を貫くキーワードであり、サン＝ピエールにとっては国家連合が保証であり、手段であった。ルソーは言ってみれば師の言葉を師にたいして向けたわけである。サン＝ピエールの時代に現にまだそうであったかどうかはともかく、師の頭のなかでは戦争は君主の行為であり、それゆえ『永久平和論』では、国家連合の効能を君主たちに説いて彼らを教化すれば、それで「十分な保証」になるという前提が殊更に掲げられないまま貫かれている。戦争が君主の行為であるかぎり、国家連合が政治体の「本当の利益」であると理論的に証明して君主の理性に訴えかければ、なるほど、戦争抑止への何よりの近道であったろう。そうであるかぎり、保証は客体的になる必要はなく、君主の理性こそ確実な保証であったろう。それにサン＝ピエールの構想があながち夢物語とばかりは言えない理由もまた実在してはいた。ルイ14世の軍隊はまだ王の私兵である性格を色濃くもち、軍隊が名実共に国家の軍隊となるには次のルイ15世の時代を待たなくて

はならなかったのである⁸⁾。サン＝ピエールからルソーにかけて、「保証」という問題は生まれたのではなく、据えつけられる場所を君主から国家そのものへ、主体的な理性から客体的な担保へと移動させられたのである。

「保証」のこうした移動にともない、戦争と平和の問題は国際関係から国内体制へと、展開され論じられる場所を移して行く。先に引いたルソーの言葉のなかにも、それは窺えるだろう。「私はすべての諸国の間に現存している関係は、その諸国のどれにも、自己の体制を改造するために必要な時間と保証を与えないはずだということを発見した」。サン＝ピエールの構想を実現するためには、国内体制の変革、言ってしまえば主権者の交代が前提になるというのである。必要な客体的保証を与える能力を、君主主権は備えていない。ルソーはしかし、そこへ来て論述の歩みを止めてしまう。「だがこの計画が実施されずにいるのは善いことだと考えよう。というのも、この計画は人類に対する狂暴で恐ろしい手段によってしか行われなければならないからだ。さまざまな革命による以外に連合同盟が設立されることはまったくありえないのだ。〔……〕この同盟はおそらく、それが以後数世紀にわたって防止するに違いない以上の害悪を、一挙にもたらすだろう⁹⁾。」一国の革命、革命を諸国に伝播させる革命戦争……それによる以外はありえない……この予言的な断定はさておき、ここでは戦争の抑止が第一義的には主権問題になり変わっている点が注目される。サン＝ピエールのプランでは国内体制の改変は問題にならないどころか、国家連合の武力はそれぞれの国内体制を維持するためにも用いられた¹⁰⁾。国家連合が国内体制を保証する——保証の方向はルソーとは逆向きであり、連合のそうした機能が君主たちに同盟を結ばせる大きな根拠になると考えられていた。しかし独自の司法機関を有し、その命令に強制力を与える武力までもつ連合は、はたしてまだ連合 *fédération* と呼ぶのだろうか。それはすでに一個の全き国家であって¹¹⁾、連合形成への呼びかけは現存の国家を解消して新しいより大きな国家を作り直そうという要請ではないのか。すると構想された国家連合が平和を保証する力を強くもてばもつほど、それは現在の国内体制、そこでの権力関係の大幅な変更を明白な含意として要請することになり、君主にとっては一層条文に署名しにくいものとなるだろう。平和の保証は今や、他国の善意や精緻な外交技術をあてにする必要のない自国の在り方そのものに賭けられているのである。国際関係は、もはや国際関係を保証することはできない。そして自国の在り方を永久平和に相応しいように改造するためには内戦を伴う革命が必要であり、更には革命を輸出する戦争まで必要であるとすれば、戦争が平和を保証するのだということになり、問題は完全に転倒されてしまう。戦争を阻む平和の前に戦争が立ち上がり、「保証」は悪無限的円環を形成する。それを抜け出すためにはおそらく「保証」そのものを捨てるか、黙ってしまうかしかなく、ルソーは後者を選んだのだった。

国内に物的な担保を置くためには主権の交代がとにかく必要な条件である——ルソーはそう考えた。そしてこの必要条件の充足に伴う激変が、彼の目には担保の定置を妨げるようにも見

えた。ルソーにあっては、技術的な保証の問題とイデオロギー的な主権の問題は緊密に結びついており、そのことが逆に技術的な不可能性を呼び込んでしまったとも言えるだろう。ルソーの沈黙によって露呈されたのは、技術的あるいは実際的な問題と理念的あるいは原則的な問題との間に横たわる深い溝であるのかもしれない。主権のタイプとその実際的な保証能力を一対一的に対応させているかぎり、現実的な方策が何も取れなくなってしまう——ルソーの「沈黙」からこうした「教訓」を引き出すことは、少なくとも可能ではある。戦争は一般的な事象となることによって、主権論の領域に足を踏み入れた。戦争一般にたいする異議は、主権の在り方を不問に付すサン＝ピエールの構想を、夢想だと断罪するほかなかった。しかしあまりに深く足を踏み入れ、密着してしまったときに、戦争は文字通り暴力的に自身の固有性を〈政治〉にたいして突きつけたのである。すると蜜月を再考し、戦争抑止と政治形態、政治体の安定とその主権、能力と権力の間に距離を置く方へ振り子が振れてもおかしくはない。技術的課題と理念的問題の差異を、理念の側から解消するのではなく、技術的に維持し、調停しようという傾向が表れてもおかしくはない。

ギベールを筆頭とする軍人哲学者たちも、国際的な平和の保証には国内的な担保が必要であるとする点では、ルソーと認識を共有している。しかし彼らは戦争の客体性を利用して保証を置こうとする——強力な軍隊である。一般的になり、自己の客体性を強く主張するようになった戦争の統制を、あくまで客体的に行おうというのである。もちろん、とりわけギベールは主[・]の軍隊によってはそれをなしえないと承知しており、ときとして共和主義者と見まごうばかりの言説を展開する。その結果、彼の政治的立場については、君主主義者なのか共和主義者なのかと何度も疑問が表明されてきた¹²⁾。しかしこの分かりにくさそのものが、保証問題にとっての主権の二義性、主権の修正は保証に必要な限りで、また可能な範囲で行えばよいとの暗黙の認識を示していないか。平和を保証するのが共和制であるなら、そして保証には統制者としての君主がいたほうがよいなら、君主制が共和制であろう……。ある主権と別の主権の差異よりも主権と軍事の差異／関係を問う戦争抑止の観点からは、サン＝ピエールとルソーは主権という同じ側に立ち、そこから出てこないと思えたにちがいない。すでに同時代においてすら、ギベールの路線が、彼の言及しなかったサン＝ピエールの構想との対立関係においてこそ理解されるべきであることに気付いている者はいた。『戦術概論』に衝撃を受けたヴォルテールはギベールに賛辞を捧げ、その最後をこう締めくくっている。「しかし白状しますれば、私はこんな願いを抱きました。／かくも美しい技芸が、決して行使されることのあるまいように、／そして公平(équité 衡平)のことわりが、地上に、／サン＝ピエール師の実現不可能な平和をもたらしてくれますように¹³⁾。」連合を通じた平和構想はサン＝ピエールからルソーの手を経て、カントへと受け渡されていく。それは政治思想史の中に輪郭のはっきりした痕跡を残し、国際連盟、国際連合へと続く系譜を形作っている。しかしルソーの頃に、糸は枝分かれし、そ

れとは気付かれにくい方向へも伸びていったのではないか。その触知しがたさはおそらく、国際政治をめぐる思考の舞台を降りてしまったことに起因するだろう。誰も軍人哲学者は国際政治に関する思想家であるとは言わない。彼ら自身もまた、そうだと考えていなかった。にもかかわらず彼らの提出した国家の戦略は、まさしく国際的な政治の問題にたいする答えを含み、ある特殊なタイプの外交を要求しており、何よりも国際政治の舞台を下側から支えようとするものだった。ヴォルテールの賛辞は、この上と下が切り結ぶ瞬間、糸が分岐する瞬間を見せてくれる。

- 1) Jugement sur le projet de paix perpétuelle, *Œuvres complètes* III, pp. 591-2.『全集』第4巻, 353-4頁。
- 2) *ibid.*, p. 592.『全集』同354頁。
- 3) *ibid.*, p. 595.『全集』同358頁。
- 4) Fragment, *ibid.*, p. 590.『全集』同350頁。
- 5) Fragments et notes sur l'Abbé de Saint-Pierre. *ibid.*, p. 658.『全集』同472頁。
- 6) 1760年12月5日付, 編集者バスチード宛書簡。邦訳『ルソー全集』第四巻に付された訳者(宮治弘之)解説に引用。p. 520.
- 7) Abbé de Saint-Pierre, *Projet pour rendre la paix perpétuelle en Europe*, Paris, 1986 (1 éd., Utrecht, 1713), p. 95.
- 8) Quimby, *The Background of Napoleonic Warfare*, *op. cit.*, pp. 89-90.
- 9) Jugement sur le projet de paix perpétuelle. *op. cit.*, p. 600.『全集』第4巻, 363-4頁。
- 10) この点については樋口謹一著『ルソーの政治思想』, 世界思想社, 1978, 「ルソーの平和思想」, 特に pp. 129-30. を参照。
- 11) ルソーはサン=ピエールの国家連合を「ヨーロッパ共和国」とも呼んでいる。Jugement sur le projet de paix perpétuelle, *op. cit.*, p. 591.『全集』第4巻, 353頁。
- 12) この点については, J-P. Charnay の前掲論文(1. 注3)を参照。またロジェ・カイヨワ『戦争論』(Roger Caillois, *Bellone ou la pente de la guerre*, Paris, 1963. 秋枝茂夫訳, 法政大学出版局, 1974.) 第四章も参照のこと。
- 13) Pièce en vers, le 30 novembre 1773, citée dans *Stratégiques*, pp. 11-13.

Ⅲ 啓蒙の戦争学——国家的抑止と兵士の身体

1770年に公刊された『戦術概論』¹⁾は、もちろんそのタイトルの示す通り実践的な兵法書ではあるものの、戦術の全体系を国家の抑止戦略の中に組み込んでいる。戦闘の指揮や兵の訓練に関する将校向けの手引き書にはちがいないものの、そうした技術的な知はより大きな演繹体系に包摂されているのである。ギバールの計画では同書は四部構成の大著『フランスの政治と軍事』の第四部をなすと予告されており、『戦術概論』の序言はその第一部から第三部までの内容を要約したものとなっている。第一部はヨーロッパの国際情勢全般を、第二部と第三部は

それぞれ、そうした情勢から導き出されるフランスのあるべき政治的構成と軍事的構成を述べるはずだった。分析の順序はグローバルな現状から個別国家の政体と軍事制度へ、そして軍事技術論へと進んでいる。書かれずに終わった三部分を序言にしたがって俯瞰すれば、基本的なモチーフは報復的抑止である。「穏健な性格にもかかわらず、臣民、領土、幸福な暮らしに攻撃を受けた場合に、国家は戦争するだろう。国家の戦争は可能な努力の一切を傾けて行われ、攻撃を仕掛けた者にそれに見合うだけの報いを受けさせないうちは絶対に武器を置かないという固い決意をもって遂行される。こうした国家の戦争は、今日の諸国がこれまで行ってきた戦争とは大いに異なるであろう。それは征服して占領地を守るようなことは求めない。それは建設よりは徹底破壊 *expéditions* を行うのだ。怒りに狂った国家が敵地に持ち込むのは炎と剣であろう。国家は報復によって、その国家の安寧を脅かしてやろうという気になりかねないすべての人々を恐怖させるだろう。自然の法にもとづくこうした報復行為を、野蛮とか所謂戦時法の侵犯とか呼ぶべきではない。それはこの幸福で平和主義的な人民にたいする侮辱にほかならない。この人民は必要とあらば立ち上がり、家を後にし、とことん戦って死にもするだろう。しかし彼らはそれで満足なのであって、復讐を遂げたのである。彼らはこの復讐の炸裂によって、自身の未来の安寧を保証する *assurer* であろう。」(*Discours préliminaires*, p. 149.)

来るべき国家はその報復力によって現在と未来の平和を保証しなくてはならず、戦術を導く戦争学 *science de la guerre* が軍隊をその現実的な報復力にする。*science* が *tactique* の行使を統制する。当時進行しつつあった、組織、装備などの面での軍隊の国家化に対応する、これは理論面での軍隊の国家化にはほかならなかった。王の領土的野心や好戦的な気まぐれから宣戦布告の根拠を奪い、戦争の開始に明確な条件を付さなければならなくなったときに、抑止が登場したのである。軍隊は王の恣意的主観性に委ねられるにはあまりに危険かつ高価な道具となっていた。その維持と使用には領主財政を越える国家的規模の経費がかかり、戦争の被害は王の名声ではなく国富の崩壊を意味していた。しかし一方で、当時のヨーロッパ情勢は、開始を明確に限定しなければならぬほど大規模になった戦争を、だからといって最初からやらないと決めてしまえるほどには到底安定していなかった。サン＝ピエールの「理性」や平和主義的な宮廷外交を通じた戦争回避策は、あまりにも「保証」を欠いた甘い夢にすぎないと思えない。ギベールはヨーロッパ諸国の現状を「デカダンス」、「弱体化 *impuissance*」、「類似化 *ressemblance*」などと特徴付け、不信と腐敗 *corruption* の相互伝播によって戦争の危機が醸成されていると見る (pp. 137-40)。弱体な国ほど複雑な外交(合従連衡, 秘密協定等々)に頼り、結果的に戦争の芽を育むだろう。「人民の弱さは抗争を永続化させる [……]。」(p. 139.)「弱い政府こそ、他国の繁栄を恐れる。」(p. 145.)つまり問題は二重である。一方では戦争は極力回避されなくてはならず、他方では平和外交に頼ってはならない。抑止力としての軍隊の位置づけは、なるほどこの二重の要請に、うまく同時に応えている。

「未来の安寧を保証する」軍隊は、そのために現時点において誇示されねばならない。完全に秘密にされた軍隊は、他国の侵略意志を未然に挫くことはできないだろう。敵は今日にしている報復力を恐れて、明日の攻撃を抑えるのだから。「国家は外国人が兵器廠、港湾、要塞、部隊を訪れることを恐れないだろう。こうした諸手段を隠すのは弱さや野心でしかない。[……] 軍事施設の光景は、その国との友情を外国人に望ませ、その国の軍隊を恐れさせる。」(pp. 148-9.)そして防御を報復力の温存と捉えれば、次の命題は相互確証破壊 MAD (Mutually Assured Destruction) を予告していよう——「戦争学の真の完成は防御を攻撃より優位に置くことにあり、諸国を相互に侵入から守ることにある²⁾。」アンドレ・グリュックスマンは抑止力をヘーゲルの『精神現象学』に帰し、核兵器にナポレオンの亡霊を見て取っているものの、その近代的な起源はまさしく近代国家と軌を一にはしなかったか³⁾……。少なくとも、国家の戦争を王の手から取り上げて国家の手元に置こうとしたときに、抑止はすでに現れている。

確実な抑止力があれば、国家連合や同盟関係は必要ないだろう。ギバールは積極的に武装中立論を唱えている。「警戒怠りなく他国からの侮辱を制するこうした国家は、その政策として、いかなる人民の同盟者 *allié* にもならないだろう。」(p. 149.) それどころか、物的な担保の明晰性は、不確かでそれゆえに不安定要因にもなりかねない外交そのものの排除を求めている。「来るべき国家は隣国とほとんど交渉する必要はないだろう。[……] それはおそらく、外交官を一人も抱えるべきではないだろう。」(p. 148.) 軍隊が安全を保証し、軍事が政治に取って代わるわけだ。とはいえ武装中立は国境の閉鎖を含意するものではなく、むしろ非政治的な、全方位に渡る文化的・経済的な交流により、中立はより強固な基礎を得るだろう。「こうした国家はあらゆる諸国の人民の友となるだろう。」(p. 149.) 「知識人 *hommes éclairés* には旅をさせねばならないが、それは隣国を傷つける手段を探るためではなく [……]、人間、科学、習俗、誤謬、善悪などについて研究するためである。[……] 逆に外国人は歓迎しなくてはならず、嫉妬心や疑念を抱かずに受け入れなくてはならない。」(p. 148.) 言ってみれば、政府レベルの関係はもたずに、民間レベルにおける人と物と情報の交換を促進する、新種の「外交」が考案されている。それは宮廷外交に比較すれば、基本的に外交の不在であると言ってもいいだろう。マキャベリ的な技術を駆使するような局面はとりたててなく、単純な方針を一貫して続けていけばいい。物的な担保がこの「外交」の安全性を保証してくれ、担保は逆に、この「外交」によって担保力を増大させられる（情報の流入、軍隊の誇示等々）。そしてそれは、外交の不確実性よりは、この「外交」の透明性を要求するだろう。軍事と「政治」の互いに送付しあうこの全体が、彼の言う「単純かつ啓蒙的」であるべき「システム」にはかならない (pp. 147-8)。誰にでも分かりやすく、他国の意図やその解釈に左右されず、常に安定して作動する「機械 *machine*」(p. 146)。宮廷の「しきたり *routine*」の代わりに国家の「方法 *méthode*」を、「偶然の代わりに計画を」(p. 164)。

しかし、ギベールが非難したものと推奨したもの、避けようとしたものと導入しようとしたものの間には、奇妙な一致を見て取ることもできるだろう。彼はヨーロッパ諸国の均質化を批判したのだった。腐敗を伝染させ、諸国をおしなべて弱体化させてしまう模倣の習性が、現時点では何よりも克服されねばならない。「諸国は互いの真似をしあい、次第に互いを腐敗させあう。」(p.138.) 模倣の結果、均質なゲーム盤として成立するにいたったヨーロッパの上では、複雑な外交ゲームが基盤の脆弱性を原因かつ結果として展開される。その際のルールがマキャベリズムだろう。軍事力を担保とする「単純かつ啓蒙的なシステム」はこうしたゲームからの離脱を図ろうとする。抑止は表の言葉と裏の意図が錯綜するゲームの外部に、単純な方法として生み落とされた。しかしこの「システム」もまた、ひとつのゲームにはちががなく、ルールの共有を諸国に要求して諸国を同じゲームの参加者へと均質化しようとするのではないか。実際、ギベールの推奨した情報の交換は、恐怖の伝播を意図するものであったし、来るべきフランスにとっての諸国は、敵になるかもしれない友という単一の資格を与えられている。報復を恐怖させる、とはゲームのルールを受け入れさせる手続きにしてルールそのものであるだろう。報復を恐怖した時点で、相手国はフランスの始めたゲームに参加し、ルールを模倣してゐるのである。なるほどそれは積極的な模倣ではないが、人と物と情報を交換しあい、同じ報復の恐怖を抱く点では諸国は均質化され、ひとつのルールがそこに通用しているだろう。ギベールの武装中立政策も、外交ゲームからの離脱というより、正確には別のゲームの設定にはかならなかった。一国からでも始めることのできる、しかしあくまでグローバルなゲームの発明だった。

ところで軍隊が平和の担保であるとする、その担保の現実的な価値を規定する軍隊の強さはいかにして決まるのか。戦争学が解析し、抽出し、再構成すべき「システム」の基本的要素とは何なのか。保証の保証を求める遡行が最終的に行き着くのはどこなのか。彼にとって、答えは極めて明白であった。戦争学が狙いを定めるべき最も原基的な要素は、兵士の身体そのもののほかならない。火薬の量や部隊の数でも、戦闘を指揮する方法でもなく⁴⁾、まずは健康で頑強、かつ柔軟な兵士自身である。論争の主要な争点が彼の言う大戦術(隊形、展開等々)にあったときに、論点をずらせたばかりか、武器や操典 *ordonnance* といった標準的で、それが問題であった戦術要素に対して幾分軽視する姿勢すら見せるのである。「模倣がもっとも顕著かつ広範に認められるのは軍事的構成と方法においてである。先入観や宗教によって分裂しているヨーロッパのあらゆる部隊が[……] 同じ武器、同じ操典をもっているのである。」(p.187.) つまりこうした面で、他国を抑止しうる他国よりも強い軍隊を作ることは甚だ難しい。力の突出をこうした面から図っても、情報の流通によってそれはすぐに模倣され、軍事力は平均レベルに引き戻され、抑止力を減じてしまうだろう。兵器や大戦術は不断に陳腐化の脅威に晒されている。すると決定的な差はむしろ、武器や操典のより効果的な使用を実現する、兵士の質に

かかっているのではないか。兵士の身体は少なくとも、諸国がまだ本格的には手を着けていない戦術要素ではないか。それは軍事的剰余価値の源泉となる未開地だったのである。そしてその開拓を追求するや、個々の兵士の質の決定は兵営での訓練の範囲を越える要因をもつことも明らかとなり、彼は「国民の心性 *moeurs* の変更」を統治の最終目標に掲げなくてはならなかった⁵⁾。

当時行われていた訓練にたいする彼の批判はかなり手厳しい。「今日実施されている類の教練は奇怪 *bizarre* なことがらである。それは武器の扱いと幾通りかの行軍パターンしか教えず、大部分は複雑で戦争の役には立たない。こんな馬鹿げた慣例は捨てて、兵士の身体を鍛え、柔軟にすることから始めなくてはならない。」(p. 191.)「胸をぐっと突き出し、腹を極端に引っ込め、前進するときには頭を右や左にむけ、代わる代わる片足でバランスを取って静立する、こうした動作は自然の中にはない。[……] 我が兵士たちの姿勢が単純でなく、四肢のメカニズムに合致してもいないことの証明がお望みなら、大方の訓練場に足を踏み入れてみるといい。窮屈で無理な姿勢を取らされているかわいそうな兵たちを目にするだろう。兵たちの筋肉という筋肉が縮み、血液の循環が妨げられているのを見るだろう。」(p. 201.) 身体の自然なメカニズムに適った訓練によって、具体的にいかなる戦術効果が期待されているかといえ、何よりも部隊全体の運動速度の上昇である。彼は当時の分速60歩という行軍速度では決定的に遅いと考えていた。そして実際に、彼のイニシアチブによりフランスの歩兵はその速度を分速120歩にまで上げている。似たり寄ったりの装備と戦い方が向き合うなかで、より優れた速度性能を発揮すること、それが力の突出を保証し、身体-速度のカップルが「システム」のもっとも基本的な構成要素となる。大戦術も、基礎的戦術によって実現される「より以上の速さ」を前提に組み立てられるだろう。革命戦争からナポレオン戦争にいたるまで、フランス軍はこうした大戦術によって戦場での優位を確保したのであった。『巨人がドイツに到着すると思いきや、小人の軍隊であった…』。とはいえ、この予想は当然のものではあった。というのも、人々はフランス兵のおよその身長を、街道を進む速度によって見積もっていたからであり、大柄で大股の兵士が想像されていたのである⁶⁾——軍事力とは mv^2 であると述べたナポレオンは、『戦術概論』を常に携行していたと伝えられる⁷⁾。

しかし身体への注目そのものはギベールに始まるわけではない。彼が「奇怪な」と形容する訓練、銃の持ち方から戦闘時の姿勢までこと細かに定め、身体を幾何学的な〈形〉に押し込めようとする教練自体が、身体へのある種の執着を示している。その際の身体は、開発されるべき潜在能力の総体ではないが、統制されるべき顕在性ではあり、見た目あるいは外側にたいしては執拗な馴致が施される。1764年の操典はこう述べていた。「兵士を訓練するとき第一に払うべき注意は、彼らに兵士らしさ *l'air d'un soldat* を身に付けさせることである⁸⁾。」オーストリア継承戦争の頃から、ヨーロッパ諸国は程度はさまざまであれフリードリヒ二世のプロシ

ア軍に触発されて、自国の軍隊の編成と戦術を見直し始めた。厳格な規律を必要とする斜交隊形 *ordre oblique* を、練り上げられた方法 *méthode* にしたがって駆使するプロシア軍にたいし、従来のような、将校の実戦経験に頼ってその場で編み出される戦術が役に立たなくなったのである。各国はこぞってプロシア軍歩兵操典を模倣し、プロシア的戦術に対抗する方策を研究し始めた。分析は主として、縦深隊形か横長隊形か、行軍隊形から戦闘隊形に何段階のステップを踏んで移行するか等、部隊の〈形〉とその連鎖、組み合わせに集中している⁹⁾。最終段階での白兵戦における突進力を重視すれば縦深隊形、緒戦での火力に重点を置けば横長隊形、と力点のかけ方によりそれぞれの部隊の基本形は変わってくるだろう。すると、いかなる形を採用するにせよ、部隊にその隊形を維持させ、号令一下、整然と隊形を移させる規律が絶対的な与件として求められてくる。隊形 *ordre* は同時に、兵士を部隊に縛りつける秩序 = 命令 *ordre* でもなくてはならない。兵士一人一人が部隊という機械の部品として、完全に〈形〉の一部と化さなくてはならない。兵士の姿勢の積算によって実現される全体の〈形〉が力であると想定されているのだから。まず最初に、ある局面でもっとも強いと認められる隊形が選ばれ、つぎに縦何列、横何列とその大きさが決定され、上下左右の射撃間隔も定められて、そこから各人の姿勢が演繹され、兵士はそれに合わせて自分の体を調整するよう求められる。形の分割と総合が戦術的知識の基本的操作となる。兵士に課される「奇怪な」訓練は、自己目的的な訓育であつたわけではなく、一応はそれ自体力学的な合理性にもとづいて導出されていたのである。身体—速度のカップルにあっては身体能力が直接に力へと転化するが、身体—形のそれにあっては、能力は幾何学的な形に媒介されて初めて現実の力になる。いいかえるなら、訓練は身体の内部にまで立ち入る必要もなかったからこそ、特殊な姿勢と結びついた銃器操作に終始することができた。

ギベールは隊形という問題構成の枠内においても改革者として登場する。1769年に採用された「ギベールの縦隊」と呼ばれる隊形は、変換手続きを簡素化し、何より変換時の回転操作を取り除くことに成功して、無駄な時間の短縮に寄与した。彼はこの方法をすでに1764年、『歩兵の展開訓練に関する試論』という匿名の書物において明らかにしている¹⁰⁾。つまりギベールその人にあっては、身体—速度と身体—形は競合しつつ相互に補いあっているということもでき、大革命の渦中、彼の戦術体系を全面的に取り入れて作られた1791年の操典には、むしろそうした関係がはっきりと見て取れる¹¹⁾。

しかしそれでもなおかつ、最終的担保力としての部隊の隊形と運動能力は、ひとつの「システム」= 保証体系のなかで長く互いに補いあってはられないだろう。形が力であるなら、外的な身体力を隊形へと集合させる権力と正当性が求められ、またそれで充分であり、この担保形態は「主権」によって構成される政治システムに対応している。「主権」は財であれ人であれ、既に在るものを徴収する（あるところから別のところへ移動させる）権利の総体として立ち現

れた¹²⁾。主権者とは何よりも〈税〉を課すことのできる者にほかならなかった。そしてそれゆえに、「主権」は身体力の増産までは保証することができないのである。開発としての搾取は「主権」者の行為ではなく、むしろ企業家のそれであるだろう。同じ兵士に目を注いではいても、その運動能力を増大させようとする者は、命令する権限を有する者である前に、生産の組織者でなくてはならないだろう。部隊の隊形がすなわちその力であるなら、隊形を取り、維持し、変えるよう兵士に命令するだけでよいだろうが、個々の兵士の身体能力の増大を実現するためには、増大せよと命じても無駄であり、一種の「経済的」なプログラムをもたなくてはならない。「政治的」な主権のシステムにはそこまでのことはできないのである。この保証システムは単純再生産される諸力の配分方法に、最終的な保証力を見出している。もちろん、開発と生産のシステムも、その実現に「主権者」を必要とし、そこを経由して命令を下さなくてはならないだろう。したがって、あるシステムが別のそれにとって代わるというより、システムの二重化が図られて行くと見るべきである。服従に正当性を与えるシステムと、服従の結果＝効果を増大させるシステム。この区別は革命以前にはそれほど明確になっていたとは言い難く、実際、やや先回りして言えば、革命時の軍事問題を総括できる時期になった1820年代には、運動能力を重視するギベールの理念をより突きつめた地点からの、91年操典にたいする批判が噴出するだろう。そこには確かに主権システムとは異なる何かを積極的に形成しようという意志が認められる。兵士の能力の開発を、力の移動としての服従の確保から区別して考えようという意志が。だとすると、大革命は主権の交代であると同時に、主権なるものを取り巻く環境の変容であり、主権から別のシステムが分離していく過程でもあったはずである。

- 1) Jacques Antoine Hyppolyte de Guibert, *Essai général de tactique, précédé d'un Discours sur l'état actuel de la politique et de la science militaire en Europe, avec le plan d'un ouvrage intitulé : La France politique et militaire*, édition clandestine (sans nom d'auteur) à Amsterdam; première édition à Leyde en 1770. 1772年にはロンドン、パリ、リエージュで新版が刊行されている。ナポレオン時代に編まれた『ギベール軍事著作集』の第一、二巻にも収録。*OEuvres militaires de Guibert, publiées par sa veuve sur les manuscrits et d'après les corrections de l'auteur*, 5 vols., Paris, 1803. この著作集版が最も広く読まれた。1977年には『戦術概論』をはじめとするギベールの主要著作を含んだ *Guibert, Stratégiques* が L'Herne 社から刊行されている (*Stratégiques* と略記)。本稿本文および注の括弧内頁数は同書のもの。
- 2) *Eloge du roi de Prusse, Stratégiques*, p. 711.
- 3) André Glucksmann, *Le Discours de la guerre*, Paris, 1967 (nouvelle édition précédée de *Europe* 2004), 1979).
- 4) ギベールは「近代国民戦争の予言者」と呼ばれるが、国民戦争の特徴である人的・物的数量の肥大化には一貫して反対している。『戦術概論』では、彼の「システム」を採用すれば兵士の数は現在より少なくすみ、大軍化は機動性を阻害すると述べられている (*Discours préliminaire*, seconde partie, p. 160. *Grande tactique*, chap. I)。大革命後に書かれた生前最後の著作『公共の力』*De la force publique*, 1790. では、焦点化していた市民軍の編成にははっきりと反対の立場を

- 取り、相対的に少数の正規軍再建を主張している（Chap. II, *Stratégiques*, pp. 573-4）。同書はジロンド派の軍隊政策に大きな影響を与えた。
- 5) *moeurs* は「法の補完物」と位置づけられるが、「法よりも効力をもっている」（p. 135）。「統治科学」はこの *moeurs* の腐敗に歯止めをかけねばならない（*Discours préliminaire, première partie*）。しかし一方では、*moeurs* の変更は天才にのみ成しうることであり、そのための一般的処方箋を書く可能性については懐疑的な姿勢も窺える（p. 369. etc）。
 - 6) ポール・ヴィリリオ『速度と政治』、市田良彦訳、平凡社、1989、p. 33. Paul Virilio, *Vitesse et Politique*, Paris, 1977.
 - 7) ナポレオンにギバールが与えた影響については次の二著を参照。Jean Colin, *L'Education militaire de Napoléon*, 1900. Liddel Hart, *The Ghost of Napoléon*, New Haven, 1934.
 - 8) Ordonnance du roi pour régler l'exercice de l'infanterie du 20 mars 1764, p. 18. *Collection des ordonnances militaires depuis 1112 jusqu'à 1801*. tom. VI, Service Historique de l'Armée de Terre.
 - 9) Quimby, *The Background of Napoleonic Warfare*, chap. II et III.
 - 10) *ibid.*, p. 105.
 - 11) 91年操典については、Jean Colin, *La Tactique et la discipline dans les armées de la Revolution: Correspondance du Général Schauenbourg*, Paris, 1902. に詳しい。
 - 12) この点については、ミシェル・フーコー『知への意志』渡辺守章訳、新潮社、1986、113-7 頁を参照のこと。

IV 〈武装せる国（民）〉——抑止主体の自己触発

諸国からの軍事干渉が懸念される中、諸党派のせりによって「開戦」の政治的価格がどんどん釣り上げられていたとき、ひとりロベスピエールのみが熱を冷ます拳に出る——91年12月18日に行われた名高い反戦演説¹⁾には、しかし、抑止的なモチーフもはっきりと刻み込まれている。「私の方針 *systeme* は単に戦争を待つだけではなく、戦争を押し殺す *étouffer* ところまで目指している。」（R, VII. p. 60）「私は戦争を待てと言っているのではない。われわれが戦争を恐れなくてもよいようにするため、さらには戦争を押し殺してしまうために、われわれにできることをしなくてはならないのである。」（*ibid.*, p. 62）当時の政府の在り方に規定されていたせいでもあろうが、彼にとってもやはり、外交は信用の置けないものだった。「あらゆる外交的な計算は、確実なものを見出すことはできない。あなた方が我々に与えている、王たちの好意に関する保証 *garantie* は、そんな計算に依拠している。」（*ibid.*）戦争を抑止する保証の問題を、彼もまた引き受けていたわけである。ロベスピエールが平和外交の代わりに置く保証は、ちょうど一年前に同じ場所で行われた演説²⁾中の言葉によれば、「武装せる国 *nation armée*」そのものにほかならない。「自らの家と妻と子供と自由を守るために武装した市民で満ち溢れる、広大な国土を攻撃することほど、無謀かつ非現実的なことはないだろう。」（R, VI. p. 628.）91年の反戦演説においても、人民が最大の力を発揮するのはどんなときかと問いを立て、こう

答えている。「それは、人民が自分たちの領内で、自分たちの家のために、仲間市民、妻、子供たちの目の前で闘うときである。そのときこそ、国家のあらゆる部分が、言ってみればあらゆる瞬間に相互に助け合い、統一の力と勇気の力によって、最初の敗北を償い、なおかつ敵軍の規律上と経験上のあらゆる優位に拮抗することができる。」（R, VII. p. 61.）国民総武装により自国の内部で行なうパルチザン戦争がもっとも強力な戦争形式である、と主張する点では、ロベスピエールはクラウゼヴィッツと完全に一致している³⁾。

「武装せる国」とはさしあたって国民衛兵を意味していた。「国民衛兵とは、必要なときに自らの権利を守る完全に武装した国にほかならない。」（R, VI. p. 622.）団体精神の温床となり、盲目的で受動的な服従を強いる正規軍は現時点における「必要悪」にすぎず、国民衛兵を「対重 contre-poids」としつつ次第にその解消が図られなくてはならない（*ibid.*, pp. 617-8）。正規軍を有しているかぎり、「国民の一部が武装し、他の一部が武装しない」ことになり、それはやがて「前者による後者の運命の支配」を招くだろう（*ibid.*, p. 622）。何より正規軍は対外戦争のための軍隊であり、「他国との関係において守るべき正義の原理を策定したと厳かに宣言し、侵略の野心を捨てた後には」基本的に必要ないものである（*ibid.*, p. 628）。防衛のためには国民総武装が適し、国境を越えて進軍することがないとなれば、正規軍は存在理由を失う。「私はこのシステム（＝正規軍）は消滅すべきだと信ずる。」（*ibid.*, p. 632.）そしてそうなるや、正規軍の対重として「武装せる国」を代表してきた国民衛兵組織すら必要なくなり、*nation armée* それ自体が残るだろう。「あえて予言すれば、国民衛兵はむしろ組織されなくなるだろう。[……] 犯罪的な攻撃を撃退するために瞬時にして五百万の手に武器を取らせることのできる国が、別に軍隊を恒常的に維持しておかなくてはならないと考えるとは、何と馬鹿げたことか。」（*ibid.*）もちろんここには、中間集団を一掃して個と全体を直結させるべしとの定言命法が作用しているものの、それが対外政策と対内政策を事実上一つに結び合わせている点は、それとは別に注目ししよう。というのも、ほかならぬ抑止がそれを媒介し、個と全体の直結も抑止の観点から要求され、正当化され、媒介されているのだから。最大の対外的防衛力を得るためには対内的に「一にして不可分」の状態を実現しなくてはならず、組織をもたない「武装せる国」こそ、戦争の窒息死を保証するだろう。平和の担保は軍隊という物的な装置から、国土全体に散らばった武器の精神的再統合へと転位している。ロベスピエールは個人が自衛のため武装する権利を承認し（*ibid.*, p. 622.）、その権利の糾合に、「規律と経験」を越える担保力を認めている。自らの生活を守る「勇気」が、武器と他人の目によって倍加されて、他国に侵略を思い止まらせる *nation* の力となるのである。すなわち、抑止力を引き出すためにはまず権利を与えなくてはならない。*nation* の力を開発するのは「義務」の概念ではなく「権利」の観念でなくてはならない。

武装した国民＝国家はしたがって、国力 *force de nation* を開発し、開発される二重の主体

にはかならない。この一種の自己触発 auto-affection 能与が総武装による抑止政策と、そこから派生するさまざまな政策の系を深い所で統制するだろう。能動と受動、攻撃と防衛、精神（愛国心）と物質（産業）等々、相反するベクトルが互いの方を指し示しあい、この相互送付のなかで敵にたいする力を増大させていく。例えばジャコバンの軍隊政策の中核に据えられた「理性的服従」の概念のなかに、その典型的な挙措を読み取ることができる。ロベスピエールにあってもカルノーにあっても、受動的服従は古い身分制の残余や新たな身分制の温床として退けられるのみならず、軍隊の力を弱める要因として批判されていた。「理性によって服従する軍隊はつねに、機械的に動く軍隊を打ち破るであろう。なぜなら自由な兵士は奴隷よりも優秀だからである⁴⁾。」サン＝ジュストは理性的服従の具体化策として軍隊内選挙を主張し、こう述べる。「軍隊内選挙は軍隊を弱体化し、分裂させるという意見もあるが、私は逆に、それによって軍隊の力が倍加されるはずだと信ずる⁵⁾。」自由と規律という、ジロンド的言説にあっては相入れないとされる二つの価値を、競り合わせ、結び付け、一致させることによる、エネルギーの増進。理性的な自由意志による個人的自由の完全な放棄によって、能動的な受動によって、nation armée は自己の力を開発する。理性的服従は人民の力の増大、その開発＝搾取と対になっているのである。「人民全体が一個の力そのものである⁶⁾。」（サン＝ジュスト）そしてこの力が新たな担保＝保証となる。

攻撃と防衛もまた、能動と受動に似た関係を取り結ぶ。この二つの極は、平和を目指した戦争の中で次第に見分けがつかなくなっていくのである。なるほど、ロベスピエールの立場は防衛的抑止とでも言うべきものであり、侵略国を蹂躪する報復を基軸に据えたギベールの攻撃的抑止からは区別されなくてはならないだろう。ロベスピエールはルソーにならい、スイスの民兵制度をモデルにしており、この山岳中立国の防衛方法は、ナポレオン戦争時のスペイン、ロシアへと受け継がれてクラウゼヴィッツにより一つの戦争形式として抽出された。それは20世紀のゲリラ戦争／戦略へと、さらに進化の道を辿っている。つまりロベスピエールは、防衛と抵抗を攻撃よりも重視する系譜のなかに明確な位置を占めてはいるのである。革命前のカルノーもまた——「（フランスの）利益は征服精神をすべて捨て、その財産の防衛に自らを限定することである。」「正しい戦争はすべて、その名を恥ずかしめない戦争はすべて、本質的に防衛的である⁷⁾。」そしてカルノーの論敵であり、ギベールの仲間であったラクロははっきりと攻撃戦の立場を取っている——「防衛戦なるものは攻撃的作戦によってしか存在しない⁸⁾。」こうした点では攻撃と防衛はあくまで対立している。

しかし対英宣戦の後、カルノーは一転してラクロに同意したばかりか、こう述べるまでになる。「一般的な規則は、集団で攻勢に立って行動するということである。あらゆる機会を捉えて白兵戦を行う。大規模な戦闘をしかけ、敵を完全に殲滅するまで追撃する⁹⁾。」ロベスピエールもまた、開戦後は和平よりも勝利を主張した。抑止力を保証とする観点からは、彼らの

立場変更は「変更」ではありえないだろう。国そのものを抑止力として樹立しようとする以上、理由はどうかであれ始まってしまった戦争は、未来の抑止力のために徹底して遂行されねばならないはずであり、どちらに力点を置こうとも、抑止は攻撃と防御を相互に入れ換え可能にする。両者は一つの戦略のもとでの二つの戦術的選択肢の地位に言わば格下げされてしまうのである。また総武装により敵の侵略意志を未然に除去するという保証システムは、容易に、その意志の主体の抹消というより確実な保証へと突き進むだろう。あくまでも保証を求めるかぎりには。ロベスピエールやカルノーの「転向」そのものが、彼らが表面に現れる言説をほとんど瞬時に変えることができた事実そのものが、深部における抑止的思考の作動を物語っていないだろうか。攻勢の精神に導かれる防衛戦争、「戦争を窒息死させる」革命戦争……。

共和主義精神と物的な財あるいは兵器もまた、後者の不足を前者が補ったり、敵の財力と味方の精神力が対置されたりする以上に、相互に代表しあう円環を形成することによって、共和国の力を生産する。あたかも共和国という一人の人間の「心」と「体」が問題であるかのように。ロベスピエールの立場を踏襲しつつ行われた91年7月のサルの演説¹⁰⁾では、火薬そのものに共和主義精神が内属させられている。「火薬の発明は巨人を普通の人間のレベルに押し戻した。〔……〕哲学者の目には、この発見は天が人に与えたもっとも高価な贈り物である。〔……〕火薬の発見はそれぞれの市民に力の平等を実現する手段を与えたのである。」（Salle, p. 707.）サルは理性（思考能力）の平等と力の平等を区別したうえで、「あらゆる生物の独立を基礎付けるこの力の平等が、明らかに自然の第一の目標だった」（強調——引用者, Salle, pp. 707-8）と言う。すなわち、火薬がこの自然の目標を文明社会の只中において実現する！そして自由・平等の精神と、武器を作りそれを全市民に行き渡らせる産業的生産能力は、動員において合体するのである。「この今から、敵が共和国の領土から駆逐されるときまで、すべてのフランス人は軍務のために徴用される。／若者は戦闘に赴き、既婚の男は兵器を鍛え、糧食を輸送し、女はテントと軍服を作り、病院に奉仕し、子供は古布を外科用ガーゼにほどこし、老人は公共の広場に出て、戦士の勇気を燃え上がらせ、諸国王への憎悪をかき立て、共和国の統一をすすめよ¹¹⁾。」国民総動員令 *levée en masse* に表れた「徴用」*levée* の概念はきわめて示唆的であろう。弾薬と生命の戦場における消費へと向けた徴収であると同時に、戦争遂行能力の生産を目的とする組織化であり、この同時性の中で消費量を上回る生産量の持続的確保が、敵にたいする優位を決定し、「徴用」という方策の根幹をなす。「徴用」こそ *nation armée* の自己触発、自己開発の現実化であるだろう。それこそ、「一個の力」、一種のエネルギーとして定置された「人民」がその定置を実現する手続きであるだろう。戦争を指揮する者も、徴収されたモノとヒトを消費するだけの人間ではなく、生産者たる企業家の資質を要求されるようになる。「〔戦場への〕議会派遣委員は企業家の類の人間でなくてはならない。企業家こそ、自らの監視を行える。〔……〕ヴォーバンがかつて、兵士でもあり労働者でもある特殊な部隊を工

兵士官に委ねよと求めたのも、同じ動機からだった¹²⁾。」

軍事的な側面から93、94年の公安委員会独裁期を眺めれば、そこで追求されていた体制はそこかしこで *nation armée* の理念の浸透を受けていたことが分かる。もちろん、どこかユートピア的な *nation armée* にとって折り合いをつけねばならない現実の障害はあまりに大きく、諸党派の争いは決定された政策の具体化過程にも微妙な影を落とすだろう。徴兵忌避者や脱走兵の多さはつねに深刻な問題だった¹³⁾。正規軍と義勇兵を混合するアマルガム法は、理念と現実の妥協を象徴するケースと見ることもできるし、同法成立にいたるまでの軍隊内選挙制や部隊規律をめぐるジャコバン派とジロンド派の綱引き、また同法成立後にまで尾を引いた下級兵士と将校の対立は、均質化による戦闘力の増大という理想からはほど遠い¹⁴⁾。けれども、開発される主体と開発される客体のめまぐるしい反転を通じた同一化、この反転を支え、かつ反転の結果立ち現れる一つの力としての人民という *nation armée* の〈実体〉は、言わば政策的思考を導くモデルとして機能し続けている。まず、平和はもっぱら軍事的主題である（政治的、まして文化的主題ではなく）という認識が、すなわち抑止的思考が当初から自らの「本質」として抱え込んでいた認識そのものが、公安委員会の手でより前面に押し出されてくる。「委員会が恐ろしい戦争を準備してきたのは、揺るぎない平和に達するためだった。しかし〔戦争が始まった以上〕公会は明確で永続的な平和条約にしか署名できないし、フランスの人民は、マキャベリ的な諸政府に自らの課す平和しか望みえない。」「平和条約の主条項が出てくるのは、兵器廠、港、火薬工場からなのだ（拍手）¹⁵⁾。」（バレー）軍事的なものの重視こそが平和をもたらすという前提は、ロベスピエール派の処刑以降にも引き継がれていくだろう。「実際、経験の証明するところでは、兵器が恐ろしくなればなるほど、戦争は殺人的でなくなっていく。〔……〕結局のところ、戦争産業こそ人間を兄弟のように互いに愛し合わせ、彼らに圧政者を憎ませ、有徳で有用な人々を尊敬させ、平等とすべての社会的徳の基礎の上に立った共和政府を樹立するのである¹⁶⁾。」

バレーが戦争と平和を明らかに重ね合わせてみせた議会報告はまた、同じ時期に革命精神と事物が生産的で開発的な動員において一体化する様をはっきりと見せてくれる。そこで直接に目指されていたのは、それまで陸軍、海軍、財政当局という三つの異なる政府部門の管轄下にあった小銃、大砲、火薬、硝石の製造および採掘を公安委員会の一元的監督の下に置く法案の可決だった。しかし政府内での権限の集中に根拠と目標を与え、この集中に仮託されているのは、戦時動員体制を全国規模に拡大する遠心性の運動であり、求心と遠心の一致による増産である。「フランス人民の革命的エネルギーゆえに日々拡がり、増えている多様な諸部分を一つの同じ委員会において結び合わせる」——それが提案を支える「新しいモチーフ」である（B, p. 175）。とりわけ硝石の採掘に関しては、動員は空想的なまでの均質性と膨張性を見せる。「あらゆるところが硝石加工場となり、あらゆる市民がその加工者となり、この愛国的運動は

次第にあらゆる地域に伝えられていくだろう。」(B., p. 179.) 逆にいえば、拡散しつつ集中する運動の中で、国土の均質化にその分節の進展を凌駕させることが「動員」だった。それにより、あるいはそれによってのみ生産の急激な膨張は可能になるだろう。「生産の運動を糧とし、年月と世紀を圧縮する革命的天分は、今日まで個々バラバラに採用されてきたあらゆる手段を凌駕する新しい開発を一挙に創出したのだ。」(B., p. 179.) ここでは、物的な生産が革命精神を養い、革命精神が生産を生産するという循環が提立されている。94年フリメール14日の法令は、すべての市民に自宅地下からの硝石採掘を呼び掛けていた。革命と自然はもはや見分けがつかない。「自然はフランスが自由の肥沃な土壌となることを予期していたかに見える。自然はフランスの土地に、専制を粉碎するに必要な素材をすべて作り上げていたのだ。[……] 誰もが[硝石という] この自然の武器をもっている。誰もが生まれつき自由への愛をもっているように。」(B., p. 180.) 革命の身振りと自然の作用の一体性は、すべての加速化において自身を証示する。「旧体制は学校を開設し、生徒を育て、化学や装甲技術について講義するのに三年を要した。新しい体制は一切を加速した。地域で選ばれた市民に、硝石を精錬し、火薬を作り、大砲を鑄造して砲口を穿つことを学ばせるため、新体制が必要とするのは三十日である。このようにして、自由の影響はあらゆる果実の成熟を早め、あらゆる教育を容易にする¹⁷⁾。」「屈従と隷属が支配していた頃、ブロンズ砲の製造所は二カ所だった。今日では十四の製造所が共和国中でフル稼働しており、毎月千百門以上を生産している。」(B., p. 177.) 共和主義者は、一体となった革命と自然の「火山に点火する」(B., p. 181.) のである。あるいは人民という火山が、その溶岩流の中に革命と自然を溶かし込む。

十八世紀後半に戦争が人の手を離れて外部爆発を起こしたとするなら、以降、ひっそりとあるいは公然と作用し続けてきた抑止的体制は、その爆発のエネルギーを内部に閉じ込め、人と物の生産活動へと転用しようとする。変態を遂げた戦争の奔流は、すべてを均質化し一体化させ、そのとき発生する斥力からさらにエネルギーを引き出そうとするだろう。再度の外部爆発の只中においてすら。あるいはそれを目指してこそ。革命戦争の勃発は、未来の戦争の根絶を不可欠の動力とするようになるや、抑止の失敗であるどころかもっとも抑止的な契機になって、政策から体制への抑止の深化に貢献する。

この深化の過程はサン＝ジュストのなかに濃縮された形で見出すことができる。彼はすでに92年の前半、社会状態と自然状態の隔絶を主張するルソーを批判し、「自然にのみ強固な基礎を置く社会状態」を構想する書物を準備している¹⁸⁾。革命的体制は自然過程との同一化に支点と根拠を求めている。そしてこの同一化は人間の集団を、「征服に対抗する政治的力」とも定義する(S., p. 923)。外へ向かう侵略からは一切の自然的根拠が剥奪され、なおかつ「主権」はその外にたいして構成されるのである。「人民が主権者であるのは対外関係においてのみである。」(強調——引用者、S., p. 934.) 人民は最初、契約を結んで共和国を作り、つぎに「外国にた

いして単一の存在となる」(ルソー)¹⁹⁾のではなく、戦争の不在としての自然状態が戦争を抑止する共和国を最初から要求しているのである。人間の自然的力は「もともと彼らの外的ないし集团的独立性を守るためにしか適していない。」(S., p. 923.) 言ってみればルソー的自然(法)主義をルソーの彼方にまで押し進めようとしたこの構想はしかし、理論的に頓挫を来して白紙に戻され、「制度」を主概念とする新しい書物が書き始められる²⁰⁾。そこではもはや自然に適っているかどうかではなく、「習俗の腐敗」を除去しうるか、「不正にたいする抵抗を植え付ける」ことができるかどうかが一切の判定基準となるだろう(S., p. 967)。放置された自然はむしろ腐敗への傾向を宿し、人工の制度の欠如は「悲劇的真理」しかもたらさない(*ibid.*)。とはいえ百八十度の転換を見せたとも言える構想の改変は、革命的〈円環〉の存在をこそ浮かび上がらせてくれる。というのも、外にたいして爆発的な力を生む一個のエネルギーとして *nation* や人民が形象化されたとき(第一の構想)、それは自然化されていると同時に、開発を受入れる状態にもあるからである。制度的な開発プランを欠いた自然は、旧体制の、より遅い自然と同じでしかない……。サン＝ジュストが新たな制度論の着想を得るうえで、モンテスキューとならび大きな役割を果たしたルペルティエの公教育案では、人間そのものが「生の素材」*matière première* として開発の対象となり、「新しい人民を創造する」ことが最大の課題とされた²¹⁾。「素材」は自然と制度を両端とする線分の中心になって、両端の反発を一個の円運動に変換するだろう。執筆の一時的中断の間に、サン＝ジュストはこの円を辿っていたのでは? 「フランスの人民に、優しく、精力的 *énérrique* で、繊細な、しかも専制と不正に屈しない習俗を与えることが不可能だと確信する日が来れば、私はわが胸に短刀を突き立てる。」(S., p. 977.) それを与えるための「一個の統治機械をもったときに、すべてが完了する」(S., p. 976.) が、この機械が向き合うのはエネルギー的素材に自然化された人民にほかならない。

この革命的抑止国家はスパルタに範を求めている。いたるところが野営地化され、訓練が日常化されて、家族や工場は軍隊組織へと解消・吸収される。起源も儀礼も異なるあらゆる宗教が、ごく簡単な儀式だけで成り立つ一つの市民宗教へと統合される。「素材の秩序による諸制度の分割」(S., p. 979.)、すなわち諸制度の分節化が積極的に推進されるものの、それは「単純さ」と「調和」を旨とする同質の習俗＝ラコニスムの拡大にこそ向けられ、最初の構想にあった「事物と諸関係の同質性」(S., p. 922.) を更新している。軍事化も直接的防衛力の確保以上に、心理的同質化のために利用されるのである。「兵士は衣服の上、傷を負った箇所金に金の勲章をつける権利を有する。勲章は祖国から与えられる。頭に傷を負った場合は胸に勲章をつける。」(S., p. 988.) 「すぐそばの兵士が剣で切られた兵士は、戦友を傷つけた武器をもって戦闘から戻ってこないかぎり、恥辱を受ける。」(S., p. 989.) 繋累を辿って行けば祖国全体に広がる情動の網状組織——「各人は自分の愛する者のために闘う。」(S., p. 983.) / 「友人同士は戦闘に際し、隣りあうように配置される。」(*ibid.*) / 「友情を信じないと言う者は追放される。す

すべての男性は二一才になると、寺院において誰が友人であるかを宣言しなければならず、この宣言は毎年、ヴァントーズの間に更新されねばならない。」(ibid.)——「祖国とは情動の共同体である。」(S., p. 977.) 権力を行使する「構成された当局」は減らされねばならず、法律も「ほとんどなくさねばならない。」(S., p. 976.) 物的定在(当局)をもたず明文化(法律)もされない習俗が習俗を生産するのであって、制度は、主体と対象が同じであるためになおること見えにくい生産する習俗と生産される習俗の間に介入して、経済的な効力を発揮するのである。「われわれが提案している諸制度を用いれば、子供でも、権力を握った邪悪な人間による抑圧に抵抗できる。」(S., p. 968.) 完成されれば、あらゆる市民が強制されるまでもなく自身を祖国へと動員しているこの「制度」こそ、国民総動員の理想型であるだろう。そのとき、動員はすでに政策ではなく体制そのものと化し、内外の反革命を完全に抑止しているだろう。

この理想型はしかし単なるユートピアではなく、革命戦争の現実の中に自身の鏡をもっていた。議会派遣委員としてライン軍に従軍したサン＝ジュストは、そこに写った臃気な像を読み取って、くっきりとした理想型を再構成したのかもしれない。なるほど訓練と経験の不足は、いかに愛国心に満ち溢れている部隊であっても、最初の号砲が轟くや一目散に逃げ出してしまう事態を生まざるをえなかった。ショーエンブルグ将軍の戦場からの詳細な書簡は、指揮官が部隊の規律不足にどれほど悩まされ続けたかを如実に示している²²⁾。ほとんど訓練を受けずに供給されてくる新兵たちに、必要な技術と規律をその場で教えながら戦う。彼らにもできる戦い方をその場で考える。それが将校の仕事だった。その中で彼らは国民軍の様態を、サン＝ジュストにヒントを与えてもおかしくない姿へと彫琢していくのである。91年に作成され、その後1831年まで修正されることのなかった教書は実際の役には立たなかった。この教書はギベールの戦術システムを全面的に採用し、18世紀後半の兵学論争に一つの決着をつけはしたものの、そのとき公式に導入された改良型混合隊形ですら、一線の将校からは「過度の形式主義」と批判されて、無視さえされた²¹⁾。とりわけ縦深隊形は93年と94年の間、攻撃用にはまったく用いられていない。「この操典は学識ある人々の手で起草された。しかし彼らの大部分は戦争経験が全然ないか、あってもほんの少しという者にすぎない。この操典は敵を前にして実施されるよりは、儀礼演習において部隊を華麗に見せるのに適している²⁴⁾。」「ライン展開など大抵の場合、美しいパレードにすぎない²⁵⁾。」書かれた隊形＝命令に従う代わりに彼らが行ったのは、書かれていない非定形の部隊を作ることだった。「迷子の子供たち」とも呼ばれた散兵である。18世紀前半から知られてはおり、7年戦争時にはそれを用いることが当たり前になっていたにもかかわらず、64年の教書で一度ほんの少し言及されただけで再び一世紀の間、公式の戦術の中には存在しないことになっていた部隊である。「撃て」と「突撃」の二種類の命令しか必要とせず、本質的には緒戦における捨て石と考えられていた部隊が、93年と94年には主流の位置を占めている。「ある種の無秩序が、規則的にすぎる隊形より有益であることもあるのだ。あ

る程度、散兵の自由裁量に任せれば、彼らは勢い込んで壕、垣、掩蔽家屋を攻め落とすだろう²⁶⁾。」ここでの「無秩序」の「無」はサン＝ジュストにおける当局と法律の「無」に照応して
いよう。それは規律の不在ではなく、解き放たれた情動の「有」であり、見えないけれども実
在する同質の絆の威力であろう。散兵はあれこれ指図されずとも、自身を祖国の生＝自らの死
へと動員する。彼らはあくまでも自由に、目標に服従する。「形式主義的」な操典は無用の法
律にすぎず、将校はときに有害な当局に変わるのである。この部隊が組織されるにあたっては、
別の、政治的な動機も働いていた。将校たちに根深い不信感をもっていた政治家には、彼らの
技術と頭数を当てにしないですむこの部隊のほうが、共和国には適していたのである。カル
ノーは兵種を混合する師団編成よりは、散兵だけからなる部隊 *campagnie franche* を作るよ
う、議会に求めている。「戦争では、多くの個人に同時に大きな影響力をもたせるようなこと
は避けねばならない。〔……兵種混合は〕祖国の運命を同時に複数の者の手に握らせることで
あり、中の一人の失敗でも全体の敗北につながり、利害、嫉妬、野心があまりにしばしば全般
的不服従に結びついてしまう²⁷⁾。」関節において脱臼する可能性のある編成よりは、まずは同
質性の確保を。蜂の大群が野犬の群れのような軍隊が、実戦的にもイデオロギー的にも良いと
され、その強さは戦場においてかなりの程度実証されたのである。

いきなり前面に踊り出たこの戦い方はしかし、国民軍が実戦経験を積むにつれて、やはり舞
台背景に退き、本来の補助的な地位に戻っている。96年から97年にかけて徐々に訓練が浸透し
始め、97年3月16日にナポレオンが混合隊形を再開するや、91年教書はようやく文字通りの参
照基準となり、以降の戦場を規定し続けるだろう。その意味では、散兵への依存は明らかに例
外性を帯びている。また、大衆動員は比較的短い危機の時期には不可避かつ有効であっても、
その持続は別の危機を招来しかねず、長く続けることは到底できないだろう。93年と94年は確
かに全般的例外状況だった。しかしその例外性は、軍事的思考にかぎってみても、底流におい
て進行していた変化を加速することに役立ちこそすれ、旧体制において支配的であったモデル
への回帰をもたらすものではまったくない。隊形の分節が部隊の力を決定するという言説は、
以降、二度と現れることはないだろう。ナポレオンが91年教書の「戦術」を採用したにしても、
彼はそれをより大きな「戦略」のなかに埋め込み、分進合撃、火力の集中使用、軍団編成とい
った「運動戦略」と総称されるシステムの一分肢として利用するにすぎない。戦術はもはや、
戦争学がカバーしなくてはならない領域のほんの小さな部分を占めるにすぎず、その相対的
重要性は領域全体の加速度的拡大につれて極小化されていく。そして領域膨張の圧力は、部隊の
運動能力そのものによって与えられるのである。より速い移動速度は大幅な迂回を可能にし、
ヨーロッパ規模で想定されるその迂回経路は兵站、占領地政策、部隊編成などに新たな課題を
課すだろう。逆に、大陸軍全体を恒常的に移動状態に置くためにも、戦争学は政治的領域に進
んで足を踏み入れねばならないだろう。この大規模な運動、それが勝敗を決する力であるとの

公準が、個々の戦場における見た目の「無秩序」を可能にし、要求しもしたのである。「形式主義」的戦術は戦略のなかで極小化されたあげくに、そのなかへ霧消してしまった。流動的な部隊の運動エネルギーが、部隊の分節を圧倒し、呑み込んでしまった。「無秩序」は、このエネルギーが戦闘力へ転化する際の堰の決壊にほかならないだろう。

すると、兵士へと向けられる視線も、終着点をより深い所へと移される必要がある。革命戦争からナポレオン時代に将軍になった者たちから見れば、ギベールのシステムすら、プロシア的戦術に毒されていると評される。「そこに見られるのは幾何学的規則性であり、完全に方形の運動であり、それらは地形のちょっとした起伏とも、実際の戦闘における熱狂とも相入れない²⁸⁾。」ギベールの「方形の運動」は、部隊の円運動を不要にして時間を短縮するために考案されたのであったが、それすら、「堅固さ、速度、柔軟性」を第一位に置く新しい戦争学の観点²⁹⁾からは、運動能力に限界を課すものでしかなかった。ギベールの「身体のメカニズム」は、自然的限界と読み換えられているわけである。むしろ「フランスの若者の好ましい体質＝性向を維持し、自分の能力にたいする信頼度を増大させねばならない³⁰⁾。」したがって訓練は「精神的かつ肉体的」なものでなくてはならず、なおかつここでのアクセントは「精神」*morale*に置かれている。国民軍の主要な難点は「精神的病」に認められたのである。「この病を癒すために最も効果的な治療薬であり、採用すべきおそらく唯一の方策は熱狂である³¹⁾。」無規律は処罰によって直接に根絶を図るべきではなく、同志愛、愛国心の鼓吹によって、それも訓練のなかでの競争を通じて消滅させねばならない。そこで提案された新しい訓練のなかには、たとえば水泳といった、直接の軍事教練ではないものも含まれており、一年の大半をむしろそうした「現実的訓練」*exercices réels* にあてるべきだとの主張も行われた。そしてそれらは、それを提案する将軍の言説においてすら、もはや課されるべき負荷ではなく、健康、衛生状態、身体能力などへの払うべき配慮として語られるのである。「体の清潔さに払われる配慮は、外面的態度・姿勢のために無限に細分化されている配慮と、少なくとも同程度には有益である。」「遊びや体操を推奨することによってえられる様々な利点……³²⁾。」処罰にたいする恐怖は愛国心育成のために積極的に退けられる。理想的な運動性能実現のためには、主権者の正当な命令も、恐怖を媒介にした強制もあまり役に立たず、むしろ恩寵として兵士を気づかうべきだというのである。兵士は部隊の運動能力を生む「精神的かつ肉体的」な総体として、不断の開発の対象となっている。

ギベールの批判者たちは、ジャコバン的精神主義者であったわけではない。彼らは自由の精神が敵の物理力を圧倒すると考えるどころか、あくまで軍事的諸制度の整備をもとめている。徴兵に始まり、装備の規格化、組織の見直しなどを含み、兵士の訓練にいたる制度全般の刷新が彼らの課題となるだろう。そのかぎりでは、ギベールの場合のように、訓練の在り方がシステムの中で特権的な位置を占めていると言うことはできない。しかし能力の徴収ではなく開発

に基礎を置き、自然科学、産業管理を戦争学の不可欠の要素として導入するとき、皇帝信奉者が多数を占めていた将軍たちは、バレール、サン＝ジュスト、ルペルチエら革命期の者たちと驚くほど似かよっていないか。最も効果的な治療薬としての熱狂は、「どんなに気持ちを高ぶらせても調和さえとれていれば、人は歩くことができる。それゆえ私は、われわれは昂揚さるべきだと考える」(S., p. 977.)と言ったサン＝ジュストの薬でもあったのでは？ 体の清潔さに払われる配慮は、「生の素材」のより効果的な生産のためであるだろう。開発の主体であり、その客体でもあり、それ自体が燎原を焼き尽くす一個の「火山」であった nation と人民が、革命の後に自己の実質を取り替えた気配はあまり認められない。20世紀になると、F・フォッシュ将軍は「攻勢の精神」こそ大革命以降の伝統であったと言うまでになるだろう³³⁾。

もちろん、ナポレオンの時代をコーナーとして国民国家の進路は明らかに折れ曲がっている。訣別したはずの旧体制の理念が蘇り、悲劇は喜劇として反復すらされた。ブルジョワ社会の成立は新旧のこうした烈しいシャッフルの後に訪れるだろう。そのときには革命は「恐怖」に代表させられもするだろう。明らかに、変化はあった。しかし大革命の経験は、以降の国民国家にとって、言わば本源的蓄積が資本主義的な蓄積にとって有するのと同じ意味をもちしなかったか。暴力的かつ集中的な、生産要素の生産。剰余価値生産の新しい形態の生産。動員はまさしく国民国家の「囲い込み運動」ではなかったろうか。人民は、農民が労働者になるように、国民になり、資本の無差別性には国家の均質性が照応する。生産的主体としての nation の提立は、資本の生産主体化の生起と見分けがつけにくい。実施の時点では均質化の波に吞まれていた動員も、その科学技術重視の姿勢から、すぐさまエリートの生産という新しい分節を目指すようになる。ちょうど、資本一賃労働関係成立の後、すぐさま資本間の区別が問題化するようになる。そして国民国家と資本は人＝能動的生産者＝受動的臣下という図式において、並行するのではなく結合する。だとすれば、抑止によって内部に閉じ込められた戦争は、資本の生産運動にまでエネルギーを供給してはいないか。抑止国家は近代国家の衣裳を纏いつつ、近代国家の体そのものと化していないか。奪わずに与え、不透明な厚みを増す国家の。義務や強制ではなく、権利によって搾取する権力の。

- 1) *OEuvres de Maximilien Robespierre*, 1950-8, tom. VIII (Discours 3), pp. 47-64. 同書からの引用は R., VIII, p. --- のように本文中に記す。
- 2) *Robespierre, op. cit.*, tom. VI (Discours 1), pp. 616-646.
- 3) クラウゼヴィッツの国民総武装論については『戦争論』第六篇二六章(篠田英雄訳, 岩波文庫, 1968)を参照。
- 4) Lazare Carnot, 19 le avril 1792. AP. tom. XLII, p. 185.
- 5) 1793年2月12日の演説。Saint-Just, *OEuvres complètes*, 1984, p. 419. 同書からの引用は S., p. --- のように本文中に記す。
- 6) 未完草稿中の言葉。S., p. 926. 本章注18)を参照。

- 7) Mémoire à présenter au Conseil de la Guerre au sujet des places fortes qui doivent être démolies ou abandonnées, cité par M. Reinhard dans *Le grand Carnot*, 2 vols., 1950-2, tom. I, p. 130.
- 8) cité par Reinhard, *op. cit.*, tom. II, p. 16.
- 9) ロジェ・カイヨワ『戦争論』, 前掲, 126頁に引用。
- 10) Salle, le 27 juillet 1791, AP. tom. XXVIII pp. 706-11. 同演説からの引用は Salle, p. -- のように本文中に記す。
- 11) 国民総動員令(1793年8月23日)の第一条。AP. tom. LXXII, p. 674 同令の一部の訳が『資料フランス革命』河野健二編, 岩波書店, 1989, にある。
- 12) Carnot, le 21 avril 1792, AP. tom. XLII, p. 256.
- 13) 徴兵の状況とそれが社会, とりわけ中産階級以下の層に与えた影響については次の研究を参照。
Alan Forrest, *Conscripts and Deserters: The Army and French Society during the Revolution and Empire*, Oxford, 1988. 革命戦争時の兵士の日常生活全般については次の書物が詳しい。Jean-Paul Bertaud, *La vie quotidienne des soldats de la Revolution 1789-1799*, Paris, 1985.
- 14) アマルガムをはじめとする革命時の軍制改革については次の二書が一般的な見取図を提供してくれる。Albert Soboul, *L'Armée nationale sous la Révolution 1789-1794*, Paris, 1945. J-P Bertaud, *La Révolution armée: les soldats-citoyens et la Révolution française*, Paris, 1979. 最近の研究には, フランスの軍隊が現実的に単一の国民軍となるには革命終了後, ナポレオンの時代を待たねばならないと評価するものが多い。例えば A. Forrest 前掲書のほか, 同著者の *The French Revolution and the Poor*, Oxford, 1981, chap. 8. また John A. Lynn, *The Bayonets of the Republic*, Urbana, 1984. は将校団の形成過程を具体的に跡付け, アマルガムについても示唆的。
- 15) Barère, le 1 février 1794, AP. tom. LXXXIV, p. 173, 174. 同報告からの引用は B., p. --- のように本文中に記す。
- 16) Prieur, le 28 septembre 1794, *Moniteur universel*, tom. XXII, p. 70.
- 17) Barère, 18 février 1794, AP. tom. LXXXV, p. 209.
- 18) De la nature, de l'état civil, de la cité ou les règles de l'indépendance, du gouvernement. 執筆時期は1792年の前半と推定されている(1984年版全集編者 Michel Duval の評注を参照)。なお同草稿については次のものを参照。Miguel Abensour, *La philosophie politique de Saint-Just, Annales historiques de la Revolution française*, 1966. Briaud C. J. Singer, *Society, Theory, and the French Revolution*, Macmillan, 1986, chap. 9. 市田良彦「自然と制度——サン＝ジュストによる契約破棄」大阪女子大学『人間関係論集』6号, 1989。
- 19) Du contrat social. *Oeuvres complètes* III, p. 363.
- 20) 残された断章群は Fragments d'institutions républicaines として知られる。執筆時期は1793年後半から94年にかけてと推定。同断章については, A. Soboul, *Les institutions républicaines de Saint-Just d'après les manuscrits de la Bibliothèque nationale, AHR*, 1948. を参照。他に, Abensour, 市田前掲論文など。断章のうち一部は1800年に匿名編者により公刊(現存草稿との間にはかなりの異同が見られる)され, 1831年には Charles Nodier 編の版が出ている。
- 21) 93年7月13日, 国民公会でロベスピエールにより読み上げられる。AP. tom. LXVIII, pp. 661-75. 同案については松島鈞『フランス革命期における公教育制度の成立過程』亜紀書房, 1968年, 第三章二節を参照。
- 22) J. Colin, *La tactique et la discipline dans les armées de la Revolution*. 同書はショーエンブルグ將軍の書簡とコランの論文からなる。戦場の状況については他に, A. Forrest, J-P. Bertaud の前

掲書（本章注13）を参照。

- 23) J. Colin, *ibid.*, p. LIV. 国民軍の戦術については J-A. Lynn 前掲書（本章注14）も参照。
- 24) Guivon Saint-Cyr, cité par J. Colin, *op. cit.*, p. LIV.
- 25) Général Duhesme et Général Pelet, *Essai sur l'infanterie légère*, 1814, Paris, p. 177.
- 26) Général le Couturier, Observation sur l'ordonnance des manoeuvres d'infanterie de 1791, *Spectateur militaire*, tom. IV, 1828, p.257.
- 27) Carnot, le 21 avril 1792, AP. tom. XLII, p. 255.
- 28) Général Pelet, Essai sur les manoeuvres d'un corps d'armées d'infanterie, *Spectateur militaire*, tom. IV, 1828, p. 354.
- 29) Pelet, *ibid.*, tom. VI, 1829, p. 113.
- 30) Général Fririon, De l'éducation militaire, *Spectateur militaire*, tom. II, 1827, p. 120.
- 31) *ibid.*, p. 453.
- 32) *ibid.*, p. 113, 120.
- 33) Général F. Foch, *Des principes de la guerre*, 1917, Paris, chap. 10.